吃音・流暢性障害学研究　第 1 巻 第 1 号
2017 年 12 月　1–12 頁

研究論文

半構造化面接法による吃音者の恋愛・交際心理に関する探索的検討

飯村 大智 [1,2]，宮脇 愛実 [1]

要旨：恋愛・結婚は人生のライフステージの大きな側面であるにも関わらず，吃音者の恋愛・交際心理についての検討は十分にされていない。本研究では吃音者 11 名を対象に半構造化面接を実施し，恋愛・交際心理の検討を行った。回答者の多くは恋愛・結婚に対して興味はあるものの，吃音症状そのものや社交不安等の二次的症状のために行動制限を受けていることが示唆された。交際相手には吃音をカミングアウト（表明）している人が多く，吃音の症状について理解を求めていることが示された。結婚と交際では吃音の影響も異なり，結婚に際しては自分の責任が大きくなることや，親族からの吃音の評価や自分の子供の発吃への不安などへの言及が見られた。恋愛・結婚について周囲に相談している人は多く，周囲のサポートの必要性が示唆された。ただし，回答者間で回答には多様性が見られたため，今後は回答者の性別，年齢，性格，価値観などを考慮した更なる調査が必要であろう。

キーワード：吃音，恋愛・交際，認識，成人

はじめに

吃音は流暢性およびリズムの障害（Bloodstein & Ratner, 2008）とされ，他者との円滑なコミュニケーションを妨げる場合がある。成人吃音者における吃音の影響は対人関係の形成や就労，交際場面など，多岐にわたる。すなわち成人期の吃音は人間関係の幅を狭め（e.g., Klompas & Ross, 2004），就労では職業選択や雇用・昇進に不利に働き（Briker-Katz, Lincoln, & Cumming, 2013；Klein & Hood, 2004；飯村，2016a; 2017），恋愛・交際場面における行動制限も受ける（Beilby, Byrnes, Meagher, & Yaruss., 2013；Hayhow, Cray, & Enderby, 2002）。また，QOL も非吃音者と比べて低下しており（Craig, Blumgart, & Tran, 2009），吃音の日常への影響，特に吃音症状から起こる二次的な不安や恐れ，回避行動など（Craig & Tran, 2006）の関与が示唆される。

人は成人期において，社会との関わりの中で人間関係を構築し，社会生活を送る。深い人間関係を築くものとして，他者との恋愛や結婚が挙げられるだろう。吃音者の就労に関しては国内外で様々な研究が実施されている（e.g., Briker-Katz et al, 2013；Klein & Hood, 2004；飯村，2016a, 2016b, 2017）一方で，恋愛・交際心理については十分な検討は行われていない。例えば Hayhow et al.（2002）は吃音者 332 人に質問紙調査を行い，学校・就労・娯楽・友人関係・交際関係のそれぞれで，吃音の影響の程度を自己評価してもらった。結果，約 3 分の 1 の吃音者は交際関係に吃音の影響がないと考えている一方で，多大な影響があると考えている吃音者が約 4 分の 1 存在することが分かった。また，吃音が異性へ話しかける上での障壁となっている，あるいは吃音のために結婚できなかったと言及する意見も見られた。Beilby et al.（2013）は吃音者とその配偶者 10 組を対象に，質問紙（OASES；Yaruss & Quesal, 2006）と面接調査を行い，ICF（International Classification of Functioning, Disability and Health；国際生活機能分類）に基いて環境因子・個人因子の分析を行った。環境因子としては周囲，特に配偶者のサポートが重要であり，個人因子として問題が大きかったテーマは吃音症状による社交不安や，否認，フラストレーション，それによる社会的コミュニケーションの回避行動が挙げられた。Klompas and Ross（2004）の吃音者 16 名を対象とした面接調査でも，回答者の 44％は吃音は結婚・家族生活に影響を及ぼすと述べている。これらより，恋愛・結婚において吃音の影響を受けている吃音者が一定数いることが推察される。

吃音の影響は吃音者自身が受けるだけでなく，パートナーとして吃音者を見る場合の非吃音者の視点からしても，否定的な影響傾向が指摘されている。例えば Shears and Jensema（1969）の調査では，94 名の非吃音者のうち，重度の吃音者との結婚でも厭わないと答えた者はわずか 7％であった。Zhang, Saltuklaroglu, Hough, and Kalinowski（2009）の非吃音者 91 名を対象とした質問紙調査でも，吃音が恋愛の障壁になると非吃音者が感じる場合が多いことを示している。Van Borsel, Brepoels, and De Coene（2011）は二つの実験を行っている。一つ

[1] NPO 法人吃音とともに就労を支援する会（どーもわーく）
[2] 医療法人社団富家会 富家病院 リハビリテーション室
（連絡先）飯村大智：医療法人社団富家会 富家病院 リハビリテーション室（〒 356-0051　埼玉県ふじみ野市亀久保 2197）

目の実験は，736 名の非吃音者を対象に，同年齢の異性の写真とその人の性格等の説明を口頭で行い，その人の魅力性を 10 段階で評定してもらった。半数の回答者には，呈示した写真の人物を説明する際に「彼（彼女）には吃音があります」の説明を追加した。呈示された吃音者と非吃音者の魅力性の回答スコアを比較すると，スコアの差は小さいものの，吃音者の方が有意に魅力性が低いという結果が得られた。二つ目の実験は，354 名の非吃音者を対象に，吃音の音声を聞いた後で吃音者との恋愛に関する二択の質問を行った。結果，41.2％の回答者が「吃音は恋愛関係になることを妨げるものである」の設問に「はい」の回答をしている。彼らはこれらの実験結果を統合し，非吃音者は，同年齢の吃音者について非吃音者よりも魅力を抱きにくい傾向があり，恋愛対象として捉えることが難しくなっている。 結果として，吃音者の恋愛経験の機会減少の可能性について指摘している。また，Boberg and Boberg（1990）は吃音者の配偶者 15 名の立場から，吃音の影響を検討し，相手の吃音症状に対する感情的反応や，交際時，結婚時に関連する不安について言及している。吃音は恋愛・交際に対して否定的影響を及ぼす可能性を示しているという点では，これらの研究は前述した吃音者を対象とした調査と同様の傾向である。

国内における吃音者の恋愛･交際心理に関する調査は，事例報告が数件あるのみである。水町･伊藤（2005）は，吃音者視点で，自分の子供が吃音になって動揺するという事例や，配偶者視点で，結婚後の親への紹介が心配だとする事例を報告している。見上・福田（2005）の吃音者 21 名を対象とした質問紙調査でも，女性吃音者について，結婚に際して相手に吃音のことを理解してもらえるかという不安，自身の吃音について打ち明けるべきか悩んだという回答や，子供の発吃への不安などが言及されている。しかしこれらの調査は人生のライフステージ全体を調査することが目的の事例検討であった。そのため，恋愛・結婚に主眼を置いた調査は国内では行われていない。恋愛･結婚は青年･成人期における重要なステージの一つであり，結婚については長期的な配偶者との関係もある中でより密な信頼関係の構築が必要とされ（Van Borsel et al., 2011），結婚はその人の QOL にも大きな影響を与える（Myers, 1999）。そのため吃音が恋愛・結婚に与える影響は無視できない問題であり，実態の把握が望まれる。また，これらの文献は結婚後の心理把握が主な目的となっており，結婚前の状況での調査はほとんど行われていない。

本研究では，未婚の吃音者を対象に，恋愛・交際心理に関する面接調査を実施し，吃音者の恋愛・交際心理の傾向, 価値観や意見についての実態を明らかにすること，また今後の恋愛・交際心理の調査に向けた参考となるようなデータを提供することを目的とする。

方法

1. 対象

現在未婚である吃音者を対象とし，11 名から回答を得た（男性 8 名，女性 3 名，平均年齢 26.7 ± 6.1 歳，範囲 19–39 歳，以下，A ～ K とする）。フェイスシート項目への回答から明らかとなった対象者の属性を表 1 に示す。

2. 調査時期

2016 年 5 月～ 12 月にかけて実施した。

3. 調査方法

面接に先立ち，フェイスシートおよび恋愛・結婚に関する質問紙（資料参照）を調査協力者に回答してもらった。質問紙の項目については，先行研究（見上ら，2005； 水 町 ら，2005；Beilby et al., 2013；Boberg et al., 1990）を参考に「恋愛全般」「交際相手」「結婚」「周囲のサポート」の 4 テーマを設定し，テーマごとに下位設

表 1　フェイスシート項目

回答者	年齢	性別	吃音による生活の困難度	主観的な吃音症状の重さ	心理的な悩みの大きさ	現在の交際者の有無
A	25	男	中等度	軽い	中等度	なし
B	24	男	小さい	中等度	小さい	なし
C	26	男	中等度	中等度	中等度	なし
D	21	男	中等度	中等度	中等度	なし
E	31	男	小さい	軽い	小さい	あり
F	19	男	大きい	中等度	大きい	なし
G	29	女	中等度	中等度	中等度	あり
H	25	女	大きい	中等度	大きい	なし
I	34	男	中等度	中等度	大きい	なし
J	39	男	小さい	軽い	小さい	なし
K	21	女	中等度	中等度	中等度	なし

問を設けた。天谷（1999）の面接法では，面接調査にスムーズに移るための方法として事前質問紙を設けており，今回の調査では Yes/No で答える質問が多いため，面接でのスムーズな回答を促すことを目的として事前質問紙を導入した。

質問紙調査を実施後，質問紙の記入結果を基にして半構造化面接を実施した。基本的には質問紙の項目に基づいて面接を進めるが，面接中に掘り下げる必要のあると感じた会話については，その部分をさらに詳細に聞くことも行った。面接は一人ずつ個別で実施し，時間はフェイスシート･質問紙への回答時間も含めて 1 時間とした。

4. 募集方法・倫理的配慮

第一著者が吃音者の自助団体の連絡網で調査依頼書・調査説明書を配布し調査協力者を募集した。調査協力の意思表明があった者にはインタビューを実施する第二著者に連絡を取るように依頼し，面接日時を決めた後で，面接場所のセッティングを行った。面接当日の調査前には調査説明書，同意書，および同意撤回書を提示し，調査の目的や所要時間，協力者の権利や個人情報の保護などの説明を紙面および口頭で行った。調査協力は協力者の自由意志のもとで行われること，途中で面接を中断できること，その場合にも一切不利益は生じないことなどの説明を行った。これらに同意した人のみに，同意書への署名を求め，調査を行った。

5. 分析方法

面接の会話は事前許可を得た上で録音を行ない，録音が発言内容に影響していないことの確認を面接後に行った。得られた音声は面接終了後に書き起こしを行った。得られた逐語録については Berelson の定義に基づいた内容分析（Berelson, 1957；上野，2008）を行ない，半構造化面接の設問毎に語られた内容を意味のわかる単位で抽出し，意味内容が損なわれないよう簡潔に要約してコード化した。次に，コード化したものの意味内容の類似性に従って整理・統合し，サブカテゴリを抽出して名称をつけた。同様にサブカテゴリの意味内容を類似性に従ってまとめ，主カテゴリに集約して名称をつけた。データの信頼性・妥当性を得るため，第一著者が分析案を作成し，第二著者と意見交換を行ない，統一した見解が得られるまで議論を行った。

結果

語られた内容を分類し，カテゴリに名称をつけたものを表 2 ～表 6 に示した。なお，括弧内の数字は基本的にコード抽出数を表すが，主カテゴリ名が「ある」「ない」など 2 者択一となるカテゴリについては，同一回答者による重複を避けるため回答者数を示している。

1. 恋愛全般について（表 2）

1.1. 恋愛や結婚への興味

11 名中 9 名が恋愛や結婚への興味を示していた。興味がある一方で行動に移せていない例も見られた。

1.2. 恋愛や結婚の悩みや苦労していること

主カテゴリとして「二次的な症状」「吃音症状」「経験不足」の回答順に抽出された。

1.3. 恋愛や結婚に影響しているもの

吃音の影響については，影響していると答えた人が 11 名中 8 名と多かった。一方で吃音以外としては「性格特性」や「コミュニケーションスキル」などの項目も多く見られた。

1.4. 吃音で良かったこと

恋愛・交際面への言及はあまり見られなかったが，恋愛に限らず全般的な活動面として，「他者への気配り」など良い面への言及が多く見られた。

1.5. 交際関係を充実するにあたり，自分に欲しい能力

他者理解や対話に関する「コミュニケーション面」や，流暢性という「発話面」での言及が多く見られた。

2. 交際相手について（表 3）

2.1. これまでの交際相手と知り合ったきっかけ

「学生・就労」「吃音関連」など，様々な集まりが知り合ったきっかけとして抽出された。

2.2. 吃音のカミングアウト

交際相手に吃音をカミングアウト（表明）していたのは 7 名，していないのは 3 名であった。カミングアウトのきっかけとしては，自身の理解を求める言及があり，カミングアウトによって交際相手の「理解が得られた」り，「気持ちが楽になる」などの回答が見られた。一方で吃音を「隠したい思いや恐れ」から，カミングアウトができていない例も見られた。

2.3. 交際相手に求めること

「吃音の認知」「吃音の理解」が主カテゴリとして抽出され，「話を最後まで聞く」ことや，「症状を理解」してもらうことが具体的な項目として挙げられた。

2.4. 異性に吃音を知られたくないか

「知られても良い」と答えたのは 11 名中 8 名で，「知られたくない」と答えたのは 11 名中 3 名であった。

2.5. 交際するなら吃音者のほうがいいか

「特にこだわらない」という回答が 11 名中 6 名，「吃音者がいい，あるいはどちらかというと吃音者の方がい

表2　恋愛全般についての回答分類

カテゴリ	サブカテゴリ	語られた内容（抜粋）
恋愛や結婚への興味		
ある（9）	ある（5）	積極的にならないと出会うこともできないので，吃音で悲観的にならず自分から行動することが大切。(A)
	積極的に考えている（3）	あまり行動はしていないけど、気持ちとしては積極的。(B)
		積極的にいかないといけない（D）
	興味をもっている（1）	出会いがないだけで興味はある。(H)
ない（2）	あまり興味がない（2）	今は，一人の時間が好きで恋愛にあまり興味がない。(C)
		恋愛・結婚に固執するより，楽しいことをやっていたい。(I)
恋愛や結婚の悩みや苦労していること		
二次的な症状（7）	行動の回避（4）	出会いを作るために行動しないといけないと思っているが，最初のきっかけづくりに苦労している。(B)
		恋愛をしたい気持ちはあるけれど，行動に移せない。(F)
		恥ずかしい気持ちがあって相手に話しかけることができなかった。(J)
	自信の喪失・恥ずかしさ（3）	話すことが苦手なので，自信が持てない。(F)
		元々人見知りで以前は女性と話ができなかった。(I)
		大学生の頃はどもったときに顔が引きつったり，首を振ったりしていたので，それを見られたくなかった。(J)
吃音症状（4）	自分の言いたいことを言う（3）	告白するときに吃音で言葉が出なかった。(A)
		付き合っているときに言いたいときに言えなかったことが結構あった。(D)
		新しい場所に踏み込むと，自己紹介で名前を言うことができない。(F)
	吃音症状による周囲の反応（1）	合コンで吃音が出てしまい，話していて嫌な顔をされたり，後から色々言われたりした。吃音のせいで良い第一印象を与えることができない。(I)
経験不足（3）	付き合うステップ（2）	たくさん話してお互いのことを知った上で付き合うような，付き合うまでのステップをうまく踏めるようになりたい。これまでにそういった経験がないため，不安がある。(D)
		相手との距離のつめ方がよくわからず，どうアプローチをしていければいいのかが分からない。(F)
	出会い（1）	出会いがない。(H)
恋愛や結婚に吃音は影響しているか		
影響している（8）	心理面（6）	吃音の捉え方。症状が重い人でも明るくて気にしない人もいるので。(B)
		吃音で話すことが苦手になり，自信がもてない。(C)
		吃音があるために出会いの場に行く気になれない。(F)
		生まれてくる子供の発吃の心配。(G)
	症状面（2）	新しい場所に踏み込むと，自己紹介で名前が言えない。(F)
影響していない（3）	あまり気にしていない（3）	自分自身あまりどもらず，どもる言葉を避けているから，あまり影響はない。(A)
恋愛や結婚に吃音以外のものは影響しているか		
影響している（9）	性格特性（4）	人見知りなので，相手の家族の親族と話すときにマイナスな影響が出るかもしれない。(E)
		十代の頃は吃音のせいで卑屈になってしまい，それが雰囲気に出ており，表情が暗かった。(I)
		積極性がない。(F)
		楽しいコミュニケーションが苦手で，根が暗いのかもしれない。(G)
	コミュニケーションスキル（2）	自分は発達障害も持っていると思っていて，相手の気持ちが理解できない，返事の返し方が分からないなどで心理的負担になり，また人間関係を築くのが大変になる。(C)
		トーク力や空気を読む能力。(F)
	経験不足（1）	まだ恋愛をしたことがないため分からない。(H)
	その他（2）	趣味があまり同世代と合わない。(F)
		出不精であることや、服装のこと。(J)
影響していない（2）	あまり考えたことがない（2）	
吃音で良かったこと		
恋愛・交際面（2）	ない（1）	ないなら，ない方がいい（A）
	交際者との出会い（1）	今の交際者と出会うことができた。(G)
その他（9）	他者への気配り（6）	気を遣えるようになった。(A)
		辛さを知っているから相手に優しくできる。(C)
		人の痛みや辛さに気づきやすい。(D)
		吃音のために人の話を聞くことが多いので，聞き上手になった。人の反応を気にしすぎるタイプなので、それを活かせれば人の気持ちをくみ取れると思う。(I)
		人の痛みが分かるようになった。(J)
		コミュニケーションに敏感になった。(K)
	人との出会い（1）	様々な人と出会うことができた。(F)
	行動の原動力（1）	吃音だからできないと思わず，積極的に行動する糧となった。(E)
	自身の語り（1）	自分の深いことを話せるようになった。(B)

交際関係を充実させるにあたり，自分に欲しい能力		
コミュニケーション面（6）	コミュニケーションスキル（6）	相手の感情や空気が読めるようになりたい。（B） 気遣いができるようになること。（C） 相手を楽しませる能力。（E） 発達障害もあるので，他者が何を考えているかを推測する能力（H） 相手との間合いや丁度良い距離のとり方を推し量る能力。（K）
発話面（3）	流暢性（3）	自分の思っていることを言える能力。（C） 言いたいことを言いたいときに上手く言えるようになりたい。（D） 吃音があって伝わりにくいので、もっとスラスラ話したい。（H）
その他（5）	性格特性（3）	時間の使い方。（A） 自信。（C） 明るさや笑顔。（I）
	その他（2）	好きな人に好きになってもらえる能力。（F） ファッションセンス。（J）

表 3　交際相手についての回答分類

カテゴリ	サブカテゴリ	語られた内容（抜粋）
これまでの交際相手と知り合ったきっかけ		
場所がある（9）	学生・就労（5）	学校（A，K） アルバイト（B，F） 職場（E）
	吃音関連（2）	吃音の集まり（A，G）
	その他（5）	友達の紹介（C） 社会人サークル（I） 恋愛結婚サービス会社の主催するパーティ（J） インターネット（K）
吃音のカミングアウト		
している（7）	するきっかけ（5）	好きな人には知って欲しかった。（B） 自分のことをちゃんと知って欲しいという気持ちがあった。（F） 吃音のことを言わないと本当の自分ではないと思った。（J） 気遣いをしてもらうことが増えた。（A） 早い段階で言った方がいいかなと思い，年齢的に結婚も考えていたため。（I）
	理解が得られた（3）	相手は特に吃音のことを気にしてはいなかったが，吃音の話ができたり，どもってもじっくり話を聞いてもらえたりするなど理解が得られた。（B） 相手が自ら吃音のことを調べてくれ，理解しようと努めてくれた。（D）
	気持ちが楽になった（4）	隠していたものをオープンにしたことで気が楽になった。（E） 自分の気持ちが楽になり，安心した。（F） どもっても相手が知っているから不安がなくなった。（I） 相手はあまり気にしないような反応であったが，自分自身は吃音を隠さなくて良くなったのですっきりした。（J）
していない（3）	隠したい・恐れ（2）	下に見られるのではないかとプライドもあり，言うのが怖かった。（C） 以前は隠せるなら隠し通したい気持ちが強かった。自分自身が吃音に向き合えておらず，受け入れることができないでいた。（G）
交際相手に求めること		
吃音の理解（5）	話を最後まで聞く（2）	吃音について全てを理解してもらわなくても良いが, 話をじっくり聞いて欲しい。（B） 吃音は自信のなさの表れや，臆病ではないということを知ってほしい。また，話を最後まで聞いて欲しい。（F）
	症状の理解（2）	普通の人は吃音の苦しみはすべて分からないので，全てはわかってくれなくていい。ただこういうことで悩んでいる，どもりやすい場面，言葉をわかってくれればいい。（C，E）
吃音の認知（2）	認知のみ（1）	知っては欲しいけど気遣いはいらない。（A）
	認知と理解（1）	吃音のことを知って欲しいし，理解して欲しい。（H）
異性に吃音を知られたくないか		
知られてもよい（8）	知られてもいい（5）	今は知られてもいい。（B，C） すぐに吃音だと分かるから，知られてもいい。（A，H）
	知ってほしい（3）	知ってほしい。（E，F，J）
知られたくない（3）	知られたくない・隠したい（3）	同性異性関係なく，あまり知られたくなく隠したい（G，K） 知られたくない。中高生の時に真似をされて嫌な思いをして，女性と話すのを拒絶してしまった。（I）

交際するなら吃音者のほうがいいか		
特にこだわらない（6）	恋愛と吃音は関係ない（4）	共感できるから良いというのは甘えや逃げだと思う。共感し合えるのは好きとは違う。（A） その人が魅力的ならあんまり関係ないと思う。（E）
	自分を分かってくれれば良い（3）	同じ吃音者じゃなくても自分のことを好きになってくれるということが分かったため。（B） 吃音がある人でもない人でも自分のことを分かってくれる人なら誰でもいい。そこまでこだわりはない。（H） 私自身を受け入れてくれる人なら健康な人でも吃音の人でも関係ない。（G）
（どちらかというと）吃音者の方がいい（4）	共感ができる（4）	普通の人には理解できない辛さが有り，お互い共感できるから。（C） 壁をどうにか乗り越えようとする気持ちが素敵だから。（F） 共通点があったほうが話題もあり，共感できる部分もあるから。（J） お互いに共感をし合いたい。（K）
どちらでもない（1）	難しい（1）	どちらでもなく難しい。吃音者同士という安心感もあるが，その他の点は人それぞれで，吃音に対する考え方などは異なることもある。（I）

い」という回答が 11 名中 4 名であった。前者の理由としては，「自分を分かってくれれば吃音の有無は関係ない」という項目が挙げられ，後者の理由としては吃音者同士で「共感ができる」という項目が挙げられた。

3. 結婚について（表 4）

3.1. 交際と結婚では吃音の影響や問題は異なってくるか

「変わる」の回答が 11 名中 8 名で多かった。理由としては，結婚に伴う「責任が増える」こと，「親族への対応」が必要なこと，「発話を回避できない場面が増える」ことが挙げられた。

3.2. 相手の親族からの吃音の評価は気になるか

「心配はある」の回答が 11 名中 7 名で多かった。吃音の評価について不安を感じる意見は多いものの，他の部分でアピールして評価を得たいと「前向きに捉えたい」とする意見が多く見られた。

3.3. 生まれてくる子供の吃音の有無や将来の子供の影響を心配するか

「ある」と「ない」の回答がそれぞれ 5 名ずつであった。前者の理由としては「自身の苦労」があったため，同じ経験をさせたくないことが挙げられ，後者の理由としては「自身の苦労を逆に活かしたい」とする意見が見られた。

4. 周囲のサポートについて（表 5）

4.1. 恋愛・結婚で周囲に相談できる人はいるか

「友達」「家族」「吃音の知り合い」など，11 名中 10 名が相談できる相手をもっていた。

4.2. 交際関係を充実するにあたり，周囲に望むサポート

周囲からのサポートについては，必要と答えた人が 11 名中 8 名と多かった。具体的には，「身近な人のサポート・理解」「相談窓口」「イベント」が挙げられた。

5. 心境の変化について（表 6）

表 2 から表 5 までの語りの内容を分析した結果，「昔は…」「今は…」などの項目が多く見られたため，心境の変化に関わる部分を抽出し，コード化を行った。その結果，以前（大学生の頃）と比べると「吃音をオープンに」できるようになったり，吃音の「受容」傾向を示す回答が見られた。

考察

本調査では，吃音者 11 名を対象に恋愛・交際心理に関する探索的な面接調査を実施した。結果，吃音が恋愛・交際に与える様々な影響についての一知見を示すことができたと考えられる。

1. 恋愛全般について

恋愛や結婚への興味については，大半の回答者は興味ありと回答しており，恋愛・結婚への関心の高さが示唆された。

恋愛の悩みや苦労している点として，吃音症状だけではなく，行動の回避や心理面の症状など二次的な症状の意見が多く見られた。このような表面に出てこない悩みが大きい点については，吃音の氷山理論（Sheehan, 1970）を反映していると考えられる。また，恋愛全般の経験不足（Van Borsel et al., 2011）も要因として推察される。

吃音の恋愛や結婚への影響については，影響があると答えた回答者が多かった。吃音による話すことの苦手意識や，具体的な行動に移せないなどの回避行動が見られ，心理的な悩みとして吃音が大きく作用していることが考えられた。また，人見知りや根が暗いなど，自身に対する否定的なイメージをもっている回答者もおり，吃音による二次的影響が示唆される。一方，吃音で良かったこととして，日常生活全般において，周囲への気配りや，他者理解の促進など，プラスの側面への言及も多く見られたことは着目すべき点であろう。

自身に求める能力については，流暢面での改善はもち

表 4　結婚についての回答分類

カテゴリ	サブカテゴリ	語られた内容（抜粋）
交際と結婚では吃音の影響や問題は異なってくるか		
変わる（8）	責任が増える（6）	責任が大きくなり，自分だけの問題ではなくなる。（C，D，F，G，K）
		責任を取る場面が出てくる。（J）
		結婚は親族などが絡んでくるため。（G）
	親族への対応（3）	結婚式や相手の親への挨拶など話す場面が増える。（D）
	発話を回避できない場面が増える（2）	相手の親への挨拶，子供ができた時の対応などがあり，吃音から逃げられなくなる。（I）
		回避ができない話す場面が出てくる。（J）
変わらない（2）	相手側の理解次第（1）	恋愛の時に結婚のことも意識するため。（A）
		理解がどれだけ得られるかは相手次第だからわからない。（B）
相手の親族からの吃音の評価は気になるか		
心配はある（7）	心配はあるが前向きに捉えたい（5）	心配はあるけれど自分のアピールをして信頼・納得してもらいたい。（D）
		心配はあるけれど、たいした心配はない。本質はコミュニケーションなので，そこで信頼関係を築いていきたい。（E）
		吃音だけではなく他のところを見てもらいたい。（G）
		マイナスのイメージがある場合は話し合って説得したい。（J）
	不安を感じる（2）	コミュニケーションがとれない人だと不安に思われるのではないか。（C）
		相手方の親戚や友達に紹介された時に，吃音で嫌な顔をされないか。（I）
心配はない（2）	信頼を得られるようアピールする（2）	前向きな姿勢をみせて信頼してもらえるようにする。（A）
		吃音の説明をしたり，吃音以外をアピールすれば信頼してもらえると思う。（F）
どちらともいえない（2）		
生まれてくる子供の吃音の有無や将来の子供の影響を心配するか		
ある（5）	自分も苦労したため（5）	自分は乗り越えられたけど自分の子供はどうなるか分からないし，同じ経験をさせたらかわいそう。（E）
		自分が就活などで苦労したので，自分の子供が同じような思いや経験をしてほしくない。（F，I）
		別の問題とか出てくるのかなとは思う。吃音者同士だと生まれてくる子どもも吃音を持ちやすいなどを考える。普通の人と付き合っていたら将来の子どものことなとか、自分のせいだからそこで悩んでいたかも。（G）
ない（5）	自身の経験を活かせる（2）	自分が経験しているので，こうしたらいいのではと頑張れるように教育できると思う。（A）
		子供が吃音でも自分が吃音についての活動をしているし，サポートもできる。（J）
	事前知識を身につける（2）	事前に知識をしっかりつけておいたら良いと思う。（B）
		改善する方法もあるし，これから生きやすい環境になっていくのではないか。（C）
その他（1）	生まない（1）	自分には育てられないとか育てるのが難しいから。（H）

表 5　周囲のサポートについての回答分類

カテゴリ	サブカテゴリ	語られた内容（抜粋）
恋愛・結婚で周囲に相談できる人はいるか		
いる（10）	友達（7）	友達（A，B，D，E，F，G）
		学校の同級生（I）
	家族（6）	家族（B，D，E，G，H，K）
	吃音の知り合い（2）	吃音の集いで知り合った人（G，J）
その他（1）	相談しない（1）	相談しない（C）
交際関係を充実するにあたり，周囲に望むサポート		
必要（8）	身近な人のサポート・理解（4）	異性からの異性目線のアドバイスが欲しい（B）
		相手の家族など事前に吃音のことを調べて知ってほしい。（E）
		いきなり異性と 2 人で話すのではなく，その場や話を盛り上げてくれる人。（I）
	相談窓口など（2）	恋愛について気軽に相談できるサポートシステム，窓口が欲しい。（C）
		出会いの場を提供してもらうサービスが欲しい。（D）
	イベント（2）	吃音者の特性を考慮したイベントがあれば参加したい。（F）
		出会いの企画。（J）
	支援提供（1）	筆談や LINE などでコミュニケーションを支援するサポート。（H）
不要（3）		自分たちの問題。（A）
		サポートの必要性は感じていない。（G）

表 6　心境の変化についての回答分類

過去との心境の変化		
カテゴリ	サブカテゴリ	語られた内容（抜粋）
吃音のオープンさ (6)	吃音のカミングアウトができるようになった (3)	以前は隠せるなら隠し通したい気持ちが強かった。自分自身が吃音に向き合えておらず, 受け入れることができていなかった。ただ今なら楽だし素でいれるので, カミングアウトをすると思う（C） 大学生の頃は新しく関係を築いているときだからすぐにはカミングアウトできなかった。高校生の時は、思春期とかで余計に吃音を意識してしまっていた。…今は自分から進んでカミングアウトする。（D） 以前はまだ吃音に向き合えていない時期で自分自身が受け入れることもしたくなかった…しかし吃音の集まりに参加することで，別に隠す必要がないと思い，今ならカミングアウトできる。（G）
	異性に吃音を知られても良い (3)	今は吃音の捉え方も変わったので，知られてもいい。(B) 今は自分の吃音を異性に知られてもいい。（C） 大学生までは吃音を知られたくなかったが，言友会への参加によって周りをあまり気にしなくなった。（J）
吃音の受容 (2)	吃音に向き合えるようになった (2)	…一方で今は自助団体の参加などもあり，話すことや吃音に対して向き合うことができるようになってきた。（I） 大学生の時は，どもった時に顔が引きつったり、首を振ったりしていたので、それを見られたくなかった。恥ずかしいというのがあって話したりすることができなかった。（J）
自信がつく (1)	女性と会話できない (1)	以前は女性と話ができなかった。（I）

ろんのこと，広くコミュニケーションスキルを求めている意見が多く見られた。吃音者が流暢性に限らず社交面でのスキルの向上を望んでいることは，その支援や臨床にあたって把握する必要があると考えられる。

2. 交際相手について

交際相手と知り合った場所としては，様々な場所が挙げられた。吃音の集まりもその一つであり，後述するような吃音の「共感」を相手から求めていることが一因と考えられる。

吃音のカミングアウトはしている人が多く，自身の安心感や相手の吃音の理解が得られるなど，プラスの側面があることが示唆される。カミングアウトは就労においても周囲の理解を得る手段であると指摘されており（飯村，2016a），この調査によれば回答者の半数はカミングアウトを行っていた。単純比較はできないものの，今回の調査ではカミングアウトの割合が半数以上を占めており，職場関係よりも交際関係の方が深い人間関係が構築されているためと推察される。一方で以前はカミングアウトできなかったが, 今ならばできるという回答もあり, 背景に吃音の自助団体への参加が挙げられた。このことは，岡（1999）が自助団体の働きの一つとして挙げている「ときはなち」に該当すると考えられ,「ときはなち」が吃音のカミングアウトに関与している可能性が示された。

交際相手には, 吃音の認知･理解を求める意見が多かった。ただ一方で吃音の十分な理解は当事者でないと分からないという意見も挙げられた。吃音の全てを理解してほしい訳ではないが，それぞれの対象者が吃音の何らかの特徴を理解してほしいと思っていることが示された。吃音が異性に知られることには躊躇しないという回答者が多かった。ただし「今は」という言葉が入ることもあり，以前は知られたくなかったという心境が推察される。

交際相手としては，吃音の有無は関係ないという回答が多く見られたが，吃音者を望む回答も見られた。回答にあるように吃音者同士ではお互いの「共感」を得ることができる（小林，2008）。その共感を交際相手にも求めるのか否かで意見が分かれている可能性がある。また，吃音のカミングアウトをできていない回答者（C,G,K）は，全員交際相手に吃音者を望んでいた。カミングアウトをしていない吃音者は，吃音を隠したい思いや恐れが見られたことから, 非吃音者に十分に自己開示ができず, 共感が得られやすい吃音者を選ぶ傾向にあることが推察される。

3. 結婚について

交際と結婚では，結婚の方が責任が大きくなり，また周囲との関係性も広がるため，吃音の影響が大きくなることが示唆された。結婚に伴う会話場面の増加もまた，回答者の負担となっており，発話場面への予期不安の関与が推察される。

相手の親族からの評価については，吃音による否定的イメージなどのために心配をもつ回答者が多かった。しかし，前向きな姿勢を見せる，吃音の説明をする，吃音以外で評価してもらう，自分のアピールに努めるなどの肯定的な意見も多く見られ，吃音による否定的な面はありつつもカバーしようと考えていることが推察される。

自身の子供の吃音の心配については，回答者の半数が心配ありと回答していた。発吃への心配については見

上・福田（2005）でも言及されている。吃音は遺伝的な要素が素因として考えられており（e.g., Yairi & Ambrose, 2013），発吃についての不安要素は交際心理にあたり見逃せない側面である。不安をもつ理由として，自分と同じような経験をさせたくないという意見が多くあり，自身の吃音による困難の経験が背景にあると考えられる。一方で回答者の半数は心配していないと回答しており，自身の経験を活かせると考えていることが推察される。

4. 周囲のサポートについて

相談できる人については，友達や家族が多く，吃音の集いで知り合った人という回答もあり，自身の悩みを一人で抱え込む人は少ないという結果になった。

交際関係の充実に必要なサポートとしては，身近な人のサポート・理解や相談窓口，イベントなど，様々な意見が挙げられた。これらのサポート体制については現状不十分であることも多いが，社会的サポートは吃音者の自尊心や動機づけを向上させることも示されているため（Blumgart, Tran, & Craig, 2014；Trichon & Tenowski, 2011），より一層の吃音者の恋愛・結婚支援の必要性が示唆される。

5. 過去と心境の変化について

過去を振り返ると，吃音を周囲に知られることの抵抗が減る意見が多く見られた。吃音の自己受容や，隠すことの「恐れ」が減少したものと考えられる。このような吃音のオープンさ・自己受容ができることについては，「吃音の恋愛・交際への影響」があまりないと答えた回答者（A,D,J）が全員言及していた。これらの回答者は，全員が異性に吃音を知られても良いと回答し, 2 名（A,D）が交際相手にこだわらないと回答し，全員が自身の子供の心配がないと回答していた。このことから，吃音の影響が少ない回答者は，吃音のオープンさ・自己受容が十分にできており，交際相手や自身の子供への心配などが少ない傾向にあることが示された。吃音のカミングアウトにより周囲の理解が得られることは飯村（2016a）でも述べられており，経験の要因によるところは大きいものの, 吃音の自己開示を促す試みは行われるべきであろう。

6. 調査の限界と今後の展望

第一に，本調査の回答者は 11 名と少ない。本調査の回答者は吃音者の自助グループに参加したことのある者，あるいは興味のある者でかつ調査に協力意思を示した者に限られている。また結婚の有無によって恋愛観の変容が予想されるため，対象を現在未婚である吃音者に限定した。そのため，回答者のバイアスは避けられないだろう。吃音が恋愛に与える影響については，症状自体の重症度に加えて本人の心理症状，二次的障害，そして回答者の恋愛に対する価値観や経済状況（Blumgart, Tran, & Craig, 2010）など様々な要因で影響を受ける。今後はサンプル数を増やし，恋愛に影響を与える様々な要因（年齢，性別，重症度，心理面など）について検討するとともに, 個別の傾向に加えて定量的な評価を行い，吃音者の全般的な傾向も明らかにしていく必要があるだろう。

第二に，恋愛・交際関係に影響を及ぼす要因が，吃音の言語症状か，二次的および合併症状か，それとも本人の気質・特性的な面に由来するのかについては留意すべきである。また，本調査では，対照群を設けていない。そのため今後は吃音のない対照群を設け，対照群との比較により，吃音者特有の恋愛・交際心理の抽出が求められる。

第三に，今回の質問項目の妥当性についても検討が必要である。近年は障害の分類として ICF を用いて吃音によるインパクトが評価されるようになってきており（Yaruss et al., 2006），結婚もまた QOL に関わる重要な要素であろう（Myers, 1999）。今後は OASES（酒井・小倉・森・Chu・坂田，2015；Yaruss et al., 2006）などによって測定される吃音のインパクトと恋愛・交際心理との関連性についても検討が求められる。今回はカテゴリ分類後，結果に基づいて「心境の変化について」というテーマを新たに設けたが，それ以外の設問を超えた共通したテーマについても調べ，掘り下げる必要があるだろう。

第四に，男女差の考慮である。本研究は対象者が少ないことに加え，女性の回答者が 3 名のみであった。男性と女性で恋愛・交際心理が異なることは，吃音者に限らず人間全般として当てはまることであろう（天谷，2005；水野，2002）。吃音者での性差の心理としては例えば，女性の吃音者は男性の吃音者よりも羞恥心が強かったり、吃音を隠そうとする傾向がみられるという報告がある（見上ら，2005）。今回はサンプル数の少なさにより，個人差の要因が大きく出ることが予想されるため，定量的な分析は行っていない。しかし，サンプル数を増やして性別を独立変数とし，また分析方法も再検討し，性別の要因による恋愛・交際心理を検討する必要があるだろう。

第五に，結婚・交際相手の有無の考慮である。今回，先行研究として引用した主な文献（e.g., Beilby et al., 2013；Boberg et al., 1990；水町ら，2005）は，既婚者への調査となっている。今回は未婚の吃音者を対象としたため，引用文献の妥当性の低さは否めない。しかし未婚の吃音者を対象とした調査はほぼ行われておらず，ま

た結婚の前後の吃音者の心理変化についてもデータは集まっていない。そのため，未婚の吃音者の恋愛心理のエビデンスの蓄積と，結婚前後の心理変化の実態把握が求められる。

以上のような研究の限界・問題点はあるものの，本研究は吃音者の恋愛・交際心理に焦点を当てた数少ない調査であり，今後の課題も踏まえて貴重な知見を得ることができたと考えられる。今後は上記のような追加調査を実施し，更なる知見の集約が求められるだろう。

まとめ

吃音は様々な面で恋愛・結婚に影響を与えており，吃音症状に限らず二次的な症状など，様々な側面が吃音者の障壁となっている場合があることが示唆された。一方で吃音をプラスにとらえ，恋愛についても前向きに捉える回答者もいた。回答者は少数であるが, その中に恋愛・交際心理について多様性と共通性を見出すことができたと考えられる。恋愛全般について興味をもつことは共通性として示された一方, 多様性として吃音の影響の有無，カミングアウトの有無，異性に吃音を知られることの有無，交際相手の選択，親族からの評価，子供の心配，心境の変化などが示された。その背景要因としては，他者への吃音の開示や，自己受容の程度が相互に関わっている可能性が示唆された。年齢や性別は明確な要因としては示されなかったものの，関与の可能性は否定できず，今後の更なる調査が必要とされる。

参考文献

天谷祐子（1999）面接法による自我体験の調査方法について，名古屋大學教育學部紀要 心理学，46, 265–274.

天谷祐子（2005）恋人と結婚相手に対して求めるものの違い : 性差と恋人の捉え方・恋愛経験の有無から，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 . 心理発達科学，52，9–19.

飯村大智（2016a）吃音者の就労と周囲の配慮に関する実態調査：予備的研究，音声言語医学，57, 410–415.

飯村大智（2016b）吃音者が抱える就労問題と関連要因について，コミュニケーション障害学，33, 121–134.

飯村大智（2017）吃音者の就労と合理的配慮に関する実態調査，音声言語医学，58, 205–215.

見上昌睦・福田真梨（2005）女性吃音者のライフステージからみた吃音に対する意識，聴覚言語障害，34, 47–57.

小林宏明（2008）セルフヘルプグループによる吃音がある人への支援の現状と展望：言友会を中心に，コミュニケーション障害学，25，164–171.

水町俊郎・伊藤伸二（2005）治すことにこだわらない，吃音とのつき合い方，京都：ナカニシヤ出版.

水野邦夫（2002）恋愛･友人関係観の性差に関する研究, 聖泉論叢，10，81–92.

岡知史（1999）セルフヘルプグループ　わかりあい・ひとりだち・ときはなち，東京：星和書店.

酒井奈緒美・小倉淳・森浩一・Chu, S.Y・坂田善政（2015）日本語版 Overall Assessment of the Speaker's Experience of Stuttering for Adults（OASES-A）の標準化，音声言語医学，56，1–11.

上野栄一（2008）内容分析とは何か：内容分析の歴史と方法について，福井大学医学部研究雑誌，9，1–18.

Beilby, J.M., Byrnes, M.L., Meagher, E.L., & Yaruss, J.S. (2013) The impact of stuttering on adults who stutter and their partners, Journal of Fluency Disorders, 38, 14–29.

Berelson, B. (1957)『内容分析』(稲葉三千男他訳) 東京:みすず書房.

Bloodstein, O., & Ratner, N. B. (2008) A handbook on stuttering (6th edition). New York. NY: Thomson-Delmer.

Blumgart, E., Tran, Y., & Craig, A. (2010) An investigation into the personal financial cost associated with stuttering, Journal of Fluency Disorders, 35, 203–215.

Blumgart, E., Tran, Y., & Craig, A. (2014) Social support and its association with negative affect in adults who stutter, Journal of Fluency Disorders, 40, 83–92.

Boberg, J.M., & Boberg, E. (1990) The other side of the block: the stutterer's spouse, Journal of Fluency Disorders, 15, 61–75.

Briker-Katz, G., Lincoln, M., & Cumming, S. (2013) Stuttering and work life: An interpretative phenomenological analysis, Journal of Fluency Disorders, 38, 342–255.

Craig, A., Blumgart, E., & Tran, Y. (2009) The impact of stuttering on the quality of life in adults who stutter, Journal of Fluency Disorders, 34, 61–71.

Craig, A. & Tran, Y. (2006) Fear of speaking: Chronic anxiety and stammering, Advances in Psychiatric Treatment, 12, 63–68.

Hayhow, R., Cray, A.M., & Enderby, P. (2002) Stammering and therapy views of people who stammer, Journal of Fluency Disorders, 27, 1–17.

Klein, J.F., & Hood, S.B. (2004) The impact of stuttering on employment opportunities and job performance, Journal of Fluency Disorders, 29, 255–273.

Klompas, M., & Ross, E. (2004) Life experience of people who stutter, and the perceived impact of stuttering on quality of life: personal accounts of South African individuals, Journal of Fluency Disorders, 29, 275–305.

Myers, D.G. (1999) Close relationships and quality of life, In D. Kaheneman, E. Diener, & N. Schwarz (eds) Well-being: The foundations of hedonic psychology, 374–391. New York: Russel Sage Foundation.

Shears, L.M., & Jensema, C.J. (1969) Social acceptability of anomalous persons, Exceptional Child, 36, 91–96.

Sheehan, J. G. (1970) Stuttering: Research and therapy, New York: Harper and Row.

Trichon, M., & Tetnowski, J. (2011) Self-help conferences for people who stutter: A qualitative investigation, Journal of Fluency Disorders, 36, 290–295.

Van Borsel, J., Brepoels, M., & De Coene, J. (2011) Stuttering, attractiveness and romantic relationships: the perception of adolescents and young adults, Journal of Fluency Disorders, 36, 41–50.

Yairi, E., & Ambrose, N. (2013) Epidemiology of stuttering: 21st century advances, Journal of Fluency Disorders, 38, 66–87.

Yaruss, J.S., & Quesal, R.W. (2006) Overall Assessment of the Speaker's Experience of Stuttering (OASES): Documenting multiple outcomes in stuttering treatment, Journal of Fluency Disorders, 31, 90–115.

Zhang, J., Saltuklaroglu, T., Hough, M., & Kalinowski, J. (2009) Jobs, sex, love and lifestyle: When nonstutterers assume the roles of stutterers, Folia Phoniatrica et Logopaedica, 61, 18–23.

（受付日 2017 年 1 月 13 日，受理日 2017 年 8 月 19 日）

資料　調査用紙

（Ⅰ）フェイスシート（論文に関係する項目のみ抜粋）

性別	□男　□女　年齢　（　　）歳
吃音による生活の困難度	□小さい □中等度　□大きい
主観的な吃音症状の重さ	□軽い　□中等度　□重い
心理的な悩みの大きさ	□小さい □中等度　□大きい
現在の交際状態	□配偶者がいる　□交際関係にある □交際関係にない □その他

（Ⅱ）恋愛・交際心理に関する設問（論文に関係する項目のみ抜粋）

項目ごとに，回答フォームに合わせて，最も当てはまるものを一つ選んでいただくか，自由に記載して下さい。	全く当てはまらない	やや当てはまらない	どちらともいえない	やや当てはまる	かなり当てはまる
現在，恋愛・結婚に興味がある	□	□	□	□	□
現在，恋愛・結婚で悩みがある	□	□	□	□	□
現在，恋愛・結婚で苦労していることがある	□	□	□	□	□
恋愛・結婚に吃音が影響していると思う	□	□	□	□	□
恋愛・結婚に吃音以外のものが影響していると思う	□	□	□	□	□
恋愛・結婚で吃音で良かったと感じたことがある	□	□	□	□	□
交際関係を充実させるにあたり，欲しい自分の能力	（				）
これまでの交際相手と知り合ったきっかけ	（				）
交際相手に吃音をカミングアウト（表明）した	□	□	□	□	□
交際相手にどのようなものを求めるか	（				）
異性には吃音であることを知られたくない	□	□	□	□	□
交際するなら吃音を持つ人のほうが良い	□	□	□	□	□
交際と結婚では吃音の影響や問題が異なると思う	□	□	□	□	□
相手の親族からの吃音の評価が心配である	□	□	□	□	□
生まれてくる子どもの吃音の有無が心配である	□	□	□	□	□
生まれてくる子どもの将来について心配である	□	□	□	□	□
恋愛・結婚で相談できる人が周囲にいる	□	□	□	□	□
交際関係を充実させるにあたり，欲しい周囲のサポート	（				）

The Japan Journal of Stuttering and Other Fluency Disorders Vol.1 No.1 1–12, 2017

An exploratory research study about the influence of stuttering on romantic relationships

Daichi Iimura[1,2], Manami Miyawaki[1]

[1] Domo-work (Specified Nonprofit Corporation)
[2] Department of Rehabilitation, Fuke Hospotal

Abstract: Although romantic relationships are of great importance in a person's life, there are few studies that investigate the role of these relationships in the lives of people who stutter (PWS). Through the use of a semi-structured interview, we explored the views of eleven PWS on romantic relationships. Our findings suggest that while many participants are interested in love or marriage, their activities are restricted due to stuttering behaviors or the accompanying social anxiety. Findings also revealed that in an effort to have their stuttering behaviors understood, many participants chose to self-disclose their stuttering to their partners. When discussing the topic of marriage, some participants expressed worry about how their partner's family might respond to their stuttering or about the possible occurrence of stuttering in their children. When making decisions about romantic relationships, many participants received advice from family and friends; thus, suggesting that additional support for PWS in the area of romantic relationships is needed. In future studies, additional factors like gender, age, and personality should be considered in order to provide further clarification regarding the influence of stuttering on romantic relationships.

Keywords: stuttering, romantic relationships, perception, adults